

カルテの書き方

三和病院顧問・千葉大学名誉教授

高林 克日己

(聞き手 池脇克則)

カルテ記載については、POMR/SOAPなどが提唱されています。忙しい外来診察の中で、きちんとしたカルテの記載の仕方をご教示ください。

<埼玉県勤務医>

池脇 読者の先生方は、ベテランの臨床実地の医師なので、今さら「カルテの書き方」というのもなんですが、何かあったときはカルテがすべてという意味では、カルテをきっちり書くのは大切なことですよね。

高林 そうですね。医療アクシデントなどでカルテ開示が求められる例も最近増えてきましたが、そこでカルテがどれだけきちんと書かれているかは、診療そのものがどうであったかを反映し、評価される重要な項目であることは間違いありません。きちんとカルテを書く習慣をつけたいものです。

池脇 「カルテをきちんと書く」というのは、どうやったらきちんと書けるのか、あるいは、どういうカルテがいいカルテなのかと考えますが、いかがですか。

高林 昔は、きれいなカルテもありましたが、読めないようなカルテも実際にありました。電子カルテの時代になって、見読性という意味では問題ないのですが、外国語が入っていたり、略語が入っていたりするカルテが、今でも残っているのは事実です。

そしてカルテの書き方も、POMR、POSが随分いわれてはきましたが、まだまだ完全に普及しているわけでもないと思います。

池脇 今おっしゃったPOMR、あるいはPOSともいうようですが、あとSOAPですね。まずPOMR、これは何なのでしょう。

高林 POSはproblem oriented systemの略で、問題志向型システムのことです。そのPOSに基づいて書いてあるのがPOMR、problem oriented medical

record、問題志向型の診療録というもので、これはローレンス・ウィード先生が1969年に米国で紹介して、米国内に普及し、そして日本では日野原重明先生がその普及に当たってこられたものです。

POMRの真髄はまさにproblemの調整にあります。よくPOSとかPOMRという、SOAPを思われる方も多いのですが、POSの中核はSOAPではなくて、まさにproblemそのものだと私は思います。患者さんの訴えや、検査の異常など、起こっている事象、病態をまず独立したproblemごとに分類、整理する。それぞれの関連を考えながら解決していく。そして、初めに挙げた症状や検査異常が、何らかの病態、病名として整理され、その治療が解決されれば診療は終わる、というのがPOMRの考え方です。

池脇 患者さんの抱えている問題を中心にしてカルテを書いていく。問題が1つであればいいのですが、2つ3つ、高齢化に伴っていろいろな問題を抱えているとなると、どれとどれがどのように結びついてくるか、頭を整理するのがたいへんな気がしますが、どうでしょうか。

高林 特に超高齢社会になって患者さんは高齢化していますから、疾患あるいは病態が複数であることは常です。これを整理するだけでもなかなかの作業かと思います。

池脇 考え方によっては、そういう複雑な病態をproblemを中心にして考えることで、自分の頭を整理するということなのでしょう。

高林 もともとカルテに記載するという作業自体が、頭の中に同時多発的に起こっていることを整理するためには、大事な手段かと思っています。

池脇 今先生が解説されたのがPOS。SOAPについてはどうでしょうか。

高林 SOAPというのは、subjective、objective、assessment、planの頭文字を取った語呂合わせで、いわゆるPlan、Do、Check、ActのPDCAサイクルを意識し、それを毎回記載することだと思います。いわばPDCAサイクルの医療版をウィード先生が考えたのですが、ここで注目するのはプランを立てる前に情報を収集する、その情報の一つはsubjective、もう一つはobjectiveを考えたのです。Subjectiveというのは患者さんの主観的な情報であって、objectiveはそれ以外、客観的なすべての情報になります。

ウィード先生の時代に比べてobjectiveの領域の情報量が格段に増加したために、subjectiveは非常に領域として狭くなってきたのですが、患者さん中心の医療を考えると、やはりウィード先生が目指した以上に、患者さんの言葉や訴えであるsubjective、Sを忘れてはいけない時代になっていると考えます。

池脇 確かにSが大事だとおっしゃるのはそのとおりだと思うのですが、こういったものが提唱された時代と今を考えると、以前は患者さんの診察によって得られる所見がOの大半だったのが、今は採血や画像から、膨大なデータが出てきて、それだけでもたいへんな気がしますが、どうでしょうか。

高林 とにかく一つは情報を集める。それを評価する。そして何をするかを考える、ということであって、あまりSとかOとかにこだわらなくても構わないかと思っています。

池脇 それぞれのproblemごとにSOAPを展開していくのでしょうか。それとも、ある程度まとまったかたちで行ってもいいのでしょうか。

高林 その辺りもウィード先生の基本的な考え方は、それぞれのproblemごとにSOAPで書きなさいということですが、ものによっては非常に細切れの文章になってしまいますし、あえてそんなに細かく分けるよりは、narrativeに書いたほうがよっぽどわかりやすいこともあると思います。ですから、その辺はあまり現在では強調しなくてもいいのかと。必ずしもSOAPで書かなければいけないものではないと思いますし、先生がおっしゃるように、幾つかのproblemがお互いに関係し合うこともあります。まとめていかなければいけないこともありますから、それは自由に書いて構わないと思います。

池脇 自分自身がそれで頭が整理できる、あるいは全く違う先生がそのカルテを見たときに患者さんの把握ができるのが、基本的にいいカルテだとすれば、その過程でいろいろなやり方があるのですね。

高林 一つは何かを見逃さない。しっかりとproblemを立てておけば忘れることがないと思います。

池脇 基本的には外来でのカルテ、という前提でお話いただいたのですが、入院も重要です。外来と入院で、多少違うところはありますか。

高林 外来は短時間の中で、しかも患者さんと対面しながら記入するため、けっこうたいへんな作業です。ですから、SOAPで書いたほうが簡単ということもありますし、書いたものがあるとで見やすいという意味では利点は多々あるかと思っています。ただ、一度にそれをきれいに書くのはなかなかたいへんですし、それこそコンピューターに向き合ってしまうと、患者さんに非難されることになります。記載する項目だけ入れておいて、患者さんが退出されてから、もう一回整理するということが、電子カルテでは容易にできますから、ぜひそういうかたちで利用されればいいかと思っています。

池脇 日々の、あるいは毎回外来でカルテを書く、入院だと毎日書いていくわけですが、サマリーでまとめることも必要でしょうか。

高林 一般に外来のカルテのサマリーはあまりないですね。入院の場合は必ず書かなければいけないのですが、逆に外来でサマリーがないと、別の先生がご覧になったときに何が行われているのかわからないこともありますし、自分でも整理がついていないのはよくないので、私は外来サマリーを書くことをすすめています。毎回のカルテにcopy-pasteして、次のカルテをもう一回つくって、1行だけ足すようなカルテがたまにあります。二次利用としてのテキストマンニングとか、いろいろな意味で見ても、あまり好ましくありません。これは外来も入院も同じですが、サマリーはサマリーでどこか別に置いて、いつでも見られるようにしておく。しかも上書きできて、最新のサマリーを用意しておくのが一番役に立ちますし、あったらいいと思っています。

池脇 代診のときに、この患者さんはどういう人だろうかと、最初のころからさかのぼると延々の作業になりますので、どこかにそういったものがあるとだいぶ違いますね。

高林 先ほども出ましたが、高齢者の場合には多くの疾患があるので、その人の経過をどこかにまとめてないと、とても理解できないし、自分が診ているだけではなくて、前医、またその前の医師がみている記録までまとめておかないと、わけがわからなくなります。

池脇 自分のカルテは、誰かがチェ

ックすると意識して書かれてはいないと思うのですが、何かあったときには行政がチェックするのも、カルテなのでしょう。

高林 厚生局が入ってきて、いろいろ大事なことが書いてないと指摘されると、それだけで返還しなければいけないものも出てきます。そういう基本的な法的問題のことももちろんあるのですが、そのカルテが今後どのように使われるかを考えないといけない。今後我々が意識していないレベルで、いろいろなかたちで電子カルテの情報は生きてきますので、10年後、100年後に使われる可能性さえもあるというつもりで書いていく。信頼に足るものでないといけないと思います。

池脇 確かに以前のカルテと比べると、電子カルテは、極端に言えば、永遠に残ることになります。そういう意味できちんとした書き方をしていくのは、外来でも入院でも同じと考えてよいでしょうか。

高林 そう思います。それから専門医だけが見るのではなくて、いろいろな先生や、他のコメディカル、あるいは他の施設や、介護施設も見ることになってきます。もちろんそれを意識してレベルを下げる必要はないと思いますが、そういう視点でカルテを書くことを心がける必要があると思います。

池脇 どうもありがとうございました。